

# 国際 I C T 利用研究学会 論文誌

Journal of International ICT Application Research Society

JIIARS

2022年 第5巻 第1号

August 2022 Vol.5 No.1

1

# 目次

## 巻頭言

コロナ禍と新しい価値観 国際ICT 利用研究学会 理事 青木 智子 .....	1
--	---

## 論文

高齢者を対象としたe スポーツによる認知トレーニングの効果検証と 参加意欲に関する研究 水國 照充（平成国際大学スポーツ健康学部） .....	3
日本全国の活断層における撓曲帯の土地利用と勾配の関係について 中村 洋介（福島大学），神谷 一生（株式会社東日本計算センター） .....	17
唐長安城の復原 ～初期平安京の正方形仮説～ 高見 友幸（大阪電気通信大学） .....	26
Python プログラミング用学習サイトのシステム設計・開発 松本 貴裕（大阪電気通信大学大学院総合情報学研究科）， 福井 昌則（徳島大学高等教育研究センター）， 高見 友幸（大阪電気通信大学） .....	34
Python/MediaPipe による高齢者体操ゲームの開発 佐藤 礼華（大阪電気通信大学大学院総合情報学研究科）， 吉岡 輝貴（大阪電気通信大学総合情報学部）， 李 牧イ，高見 友幸（大阪電気通信大学大学院総合情報学研究科） .....	42
多言語対応情報セキュリティe-Learning システムと自然言語処理 永田 清（大東文化大学経営学部） .....	47

## 編集後記

国際 ICT 利用研究学会 副会長 上山 俊幸（千葉商科大学） .....	60
---------------------------------------	----

## コロナ禍と新しい価値観

国際 ICT 利用研究学会  
理事 青木 智子

コロナ後、改めて私たちの生活が大きく変わったことに日々驚かされます。昨夏、デルタ株に罹患した私は、「大学に行かなくても授業はできる」ことを実感しました。なにより1週間後に控えたワクチン接種が、昭和の頃の「チケットぴあ」よろしく、日々苦勞して自治体にアクセスして得た予約枠だったのが無念でした。

同じ頃、韓国に住む友人は、日本へ一時帰国後、韓国での「隔離期間」中に、朝晩同じ時間に来る安否確認電話だけでなく、GPSでの厳しい監視下に置かれ、「外にもでれなかった」そうです。韓国ではこの時期にはすでに、今、どこに行けばワクチン接種ができるかが地図アプリで検索できたようで、さすがICTの先進国だと感心しました。



勤務先でも大きな変化がありました。学生や保護者とのやりとりも、大学からだけでなく自宅から MEET を活用する機会が格段に増えました。MEET の相談は対面より敷居が低いのかもかもしれません。カウンセリング・臨床心理系の学会でも、カウンセリングにオンラインが多用されている現状について前向きな議論が続けられています。たとえば、PC作業の困難さを理由に著しく成績が低下した学生から話を聴くと、発達上の問題（自閉症スペクトラム障害）が見えてきました。逆に、不登校気味の学生がオンライン授業でめきめきと能力を発揮し、対面になったら困るという相談もあります。人の視線や態度に過剰に敏感になったり、現在の人間関係や学校への適応に不安を訴える学生も増えています。コロナ禍でのコミュニケーションは、ICT失くして成立しない部分が多く、オンライン授業は、対面とは異なる学生の一面を知る機会ともなりました。同じように多くの人々が、ICTというツールを媒介とした社会と自分との関わりについて、改めて考える必要に迫られたはずです。

たとえば、企業人の在宅勤務や勤務形態の見直しや働き方、義務教育へのICT導入の良し悪し、対面の大学で学ぶ必要があるのかなど通信（オンライン）の見直し、他者とのコ

コミュニケーションの手法，人間同士のリアルな戦いというより，情報・IT戦にも見えるウクライナ戦争など，私たちはPCやスマホがなかった時代には考えられなかった，新しい価値観をまざまざと突き付けられています。今回もまた，論文誌の1つひとつから，これらの研究がICT失くしてできなかつたこと，社会に貢献し，さらにはアカデミック領域を支えていることを実感します。今後も会員の方々の積極的な論文発表を期待したいと思います。

#### 略 歴

2012年～ 平成国際大学法学部教授

臨床心理士・公認心理師・1級キャリアコンサルタント技能士・博士（文学：立正大学）

# 編集後記

この学会誌の前号でも理事の佐久間貴士先生が編集後記にお書きになっていたように、そのときもコロナ禍でしたし、いまもコロナ禍にいます。新型コロナウイルスの感染が拡大し始めて、はや2年半が経過します。社会生活でいろいろな制約を受けて、「〇〇疲れ」という表現も使われることが多くなっています。

業種や職種あるいは企業規模などによって差があるものの、さまざまところでデジタル化の遅れが露呈し、在宅勤務を含むテレワークが普及しているような、していないような、中途半端な状態になってしまい、制度の整備途中段階ということなのでしょう。周囲の人に「コロナ禍を想定しない場合、強いていえば、在宅勤務と通常の出勤とどちらが良いですか？」と聞いてみると在宅勤務を望む人が多いように思います。とりわけ20代から40代くらいのかたにその傾向があるように見受けられます。どうも、いったん混み合った通勤電車から解放されることを味わってしまうと、元の状態は敬遠したい、戻りたくないということのようで、そのような意見が複数ありました。サンプル数が少ない上に、私の周囲のデータということで偏りがあり、母集団の推定には役立ちませんが、同じような感触を持つ人が多いのではないかと思います。実際、そのようなアンケート結果を公開しているところもあります。

学会の全国大会もコロナ禍以前は対面での開催が当たり前のこととして、何の問題も感じずにいました。講演者がどうしても会場では登壇できないという場合は、遠隔でのオンライン講演ということもありましたが、それはレアケースとして考えられていたと思います。しかし、コロナ禍に突入して全国大会のオンライン開催が、当たり前のようになってきたいま、コロナ禍が過ぎても、あるいはウィズコロナの社会状況になっても、オンライン参加が良いという人も増えてくるのではないかと推察します。

このコロナ禍では多くの人が様々な困難に遭遇しましたが、一方、ダイバーシティを考慮した勤務やイベントへの参加にオンラインを利用することの有用性が見えてきたと思います。通勤が困難な人やイベントへの参加が難しい人への心配りがもっと必要であったことに気がついたという側面もあったと思います。

対面とオンラインとを併用する、いわゆるハイブリッド型のイベント開催はコストがかかるということはありませんが、学会の全国大会も今後はハイブリッド型での開催を目指していくことが、これからのダイバーシティを考慮した社会の構築に寄与することになると考えます。さらに今後10年程度のスパンで考えれば、ポストSNSとなるかもしれないメタバース上での開催があるのかもしれませんが、足下に視線を戻しますが、本学会でも開催コストを考慮しつつ、会員のみなさまのご協力の下、ダイバーシティ社会の構築に少しでも貢献できるとすれば、それは本学会の目的にも合致すると思います。

国際 ICT 利用研究学会 副会長

千葉商科大学商経学部 教授 上山俊幸

---

## 国際 ICT 利用研究学会論文誌 第5巻 第1号

Journal of International ICT Application Research Society Vol.5 No.1

2022年8月30日 発行

発行者 国際 ICT 利用研究学会論文誌 編集委員長 山下倫範

表紙デザイン 内藤慶恵

印刷 株式会社カンファレンスサービス

問合せ先 office@iiiar.org